

13. 筋骨格系および結合組織の疾患

文献

井上基浩、中島美和、山口成広、ほか. 腰下肢症状に対する腰部傍脊柱部刺鍼の効果ランダム化比較試験. *日本統合医療学会誌* 2014; 7(2): 28-34. 医中誌 Web ID: 2015015583

1. 目的

反応(脊柱起立筋の緊張や硬結)のある傍脊柱部への正確な刺鍼の有効性の確認。

2. 研究デザイン

ランダム化比較試験 (RCT)

3. セッティング

明治国際医療大学附属病院整形外科、京都、日本

4. 参加者

変形性腰椎症と診断され、3 ヶ月以上の腰痛および下肢症状を有する患者 32 名(男性 15 名、女性 17 名)。

5. 介入

Arm 1: 反応のある傍脊柱部に正確に刺鍼する群 16 名。

Arm 2: 反応のある部を外して刺鍼する群 16 名。

両群とも施術部位は 6-10 箇所、鍼刺入後は 10 秒の雀啄術。週 1 回の治療を計 4 回。

6. 主なアウトカム評価項目

腰痛、下肢痛、下肢異常感覚それぞれに対する Visual Analogue Scale(VAS)。初回治療前後、毎回の治療前、治療終了 4 週経過後に測定。Roland Morris Disability Questionnaire(RDQ)。治療前、治療終了時、治療終了 4 週経過後に測定。

7. 主な結果

各症状の VAS 及び RDQ の経時的変化は両群ともに有意な改善を示した(Arm1 $P<0.0001$, Arm2 $P<0.0001$)。初回治療の直後効果に関しては各症状の VAS 値が群間で有意差を認めた($p<0.0001$)。各測定時点における群間比較においては Arm1 が Arm2 に比べて有意な改善を示した。両群共に脱落者無し。

8. 結論

3 ヶ月以上持続する腰下肢症状を呈する変形性腰椎症患者に対して傍脊柱部の筋緊張及び硬結部を正確な刺鍼部位とすることで、それを外した治療を行う場合よりも自覚症状の VAS や RDQ が有意に改善した。

9. 鍼灸医学的言及

現代医学的に障害高位を判断し、その高位付近の反応を呈する部(筋緊張及び硬結)を治療とした。

10. 論文中の安全性評価

両群共治療による悪化例や有害事象はなかった。

11. Abstractor のコメント

本研究は鍼灸治療の有効性を示すために、その治療点が重要となることを示唆する貴重な文献である。経穴の特異性及び適応を議論する際に本研究結果は重要な知見となる。また介入前の基準データ及びアウトカムの初期値に群間差が無かったことから、ランダム割り付けが適切に行え、かつ評価者をブラインドしていた点においても高く評価できる。しかしながら、統計学的有意差は示されているものの、臨床的有意差が不明であるため、今後 Effect size が示されること、サンプルサイズの事前設定を行い、適切な症例数によってさらなる追試が行われることを期待する。

12. Abstractor and date

大川祐世 2016.9.20